

中国語にみる共感覚比喩についての一考察

擬音語の擬態語化をめぐって

武田みゆき

0. はじめに

武田(2000)においては、擬音語・擬態語の両域で機能するオノマトペ¹について論及し、それらが擬音語から擬態語へと派生したものであるため、擬態語は、より抽象化された段階と捉え、「擬音語の擬態語化」とした。しかし、実際には、擬音語と擬態語の境界は非常に微妙²であり、そのためか多くの先行研究では、両者を一括して扱っているものが多い。³しかし、判断が可能な場合もあり、その場合の基本義は、実態音の模倣が起源という理由で、⁴ 擬音語であるとするのが妥当であると思われる。

山梨(1988:83-84)は、擬音語は擬態語に対して特別の位置付けと捉えるのではなく、広い意味での擬態語の一種であると捉えることを提起している。つまり、聴覚は、外部世界の認知フィルターの一部を構成する五感の一つで、聴覚だけに特別の資格があたえられる理由はなく、擬音語はこの聴覚による外部世界の認知の「様態」を叙述する言葉のあやの一種である、としている。これに従えば、擬音語は、「聴覚を基にした感覚比喩」で、本来の擬態語は、「その他の感覚を基にした

¹ 例えば、「ツルツルと音をたてて、うどんを食べる」における擬音語「ツルツル」が、「床がツルツルに光っている」における擬態語としても使用されている場合のことであり、「床がピカピカ光っている」の「ピカピカ」のように、擬態語のみの場合（*ピカピカと音がする）は、対象外とする。

² 例えば、「ペンでさらさら書く」の「さらさら」は、実際ペンを走らせている「音」を表現しているのか、滞りなく書く「様態」を表現しているのかは判断が難しい。

³ 管見の限りでは、唯一、苧阪(1999:4,2001:71)で、「両者における機能的な違いは心理的にははっきりしているので、分けて考える必要がある」との指摘がみえるのみである。

⁴ 耿(1986:39)は、「拟声词是用来摹拟声音的语言成分，其语言形式的象征作用是很强的。在人们的意识中，首先的、也是最自然、最直接地引起的，当然是它的声音形象感觉。」と述べている。

武田みゆき

感覚比喩」ということになる。しからば、擬音語が擬態語へ派生するという現象には、聴覚（擬音語）から、その他の感覚（擬態語）への共感覚比喩 (synaesthesia metaphor) が働いているとみることが可能となる。共感覚比喩とは、池上(1975:241)によれば、「異なる感覚器官を通じての知覚の間に認められるある種の平行性に基づいて、本来ある種の感覚について用いられる表現が、他の種類の感覚について用いられるという現象」である。

擬音語から擬態語への転化に共感覚比喩が働いていることについて、池上(1978:112)は、以下のように述べている。

「明りガガンゴトモッテイル」などと言う時、その明りの輝きの強さと「ガンガン」という強い音を表す表現の間に何らかの平行関係が感じられるのも事実である。ここでは視覚的な対象が聴覚的に捉えられているが、人間のいくつかの感覚の中にはこの種の平行性による連想が強く働くことが知られており、「共感覚」(synaesthesia)という名称で呼ばれている。(中略) 擬態語はこのような感覚の間の平行性に基づいて成り立っているわけである。「コソコソ」、「ソワソワ」、「ダブダブ」などの表現を聞くと、まるで何かそのような音が出たのではないかというような印象すら受ける。それ位、場合によってはこの平行性は強固になりうるのである。

以上のように、擬音語の擬態語化に共感覚比喩が働いていると考えれば、その感覚の転用の方向（聴覚→その他の感覚）は、次節の先行研究にみられるように、従来あらゆる言語に普遍的とされてきた大まかな方向性（触覚→味覚→嗅覚→視覚→聴覚）に逆行することになる。このことは、中国語においては、「腿酸了(足がだるい)」（味覚→触覚）、「辣眼睛(目がひりひりする)」（味覚→触覚）、日本語においては、「さらさらした手触り」（聴覚→触覚）、「ガンガン痛む」（聴覚→触覚）などの例が、少なからず存在することからも明らかである。⁵

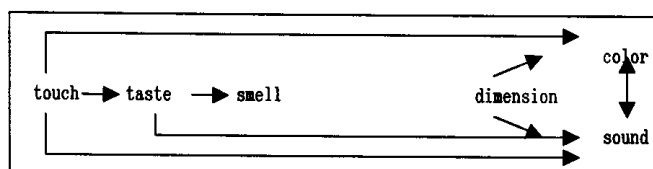
本稿は、擬音語と擬態語の境界が曖昧とされる一般の擬音語と、擬態語のみの機能を有するABB型形容詞をとり上げ、中国語擬音語の擬態語化現象に働く共感覚比喩の実態を観察し、擬音語・擬態語の連続性や、共感覚比喩の一方向性について考察するものである。

⁵ 森(1995)でも、味覚を中心としたデータを基に、従来の一方向的体系を疑問視する報告がなされている。

1. 先行研究にみる共感覚比喻

Williams(1976:463)は、英語における五感の修飾・被修飾関係を図1のように示し、この結果から比喻の方向が一方向であることを指摘している。

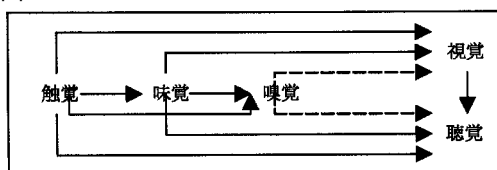
図1



またウルマン(1964:288)は、詩の用例から、「転移は感覚中枢脳の下域から上域へ、あまり分化していない感覚から、一層分化しているものへ昇っていく傾向があって、その逆ではない」と指摘している。つまり、触覚、熱覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚の順に上昇していくとしている。しかし、村田(1989:65)は、ウルマンのデータには、聴覚が被修飾になる場合が最も多く、このデータから、分化されない感覚から分化された感覚への傾向は説明できない、と指摘している。

日本語においては、山梨(1988:60)が、五感の修飾・被修飾関係を図2のように示した。山梨は、ウルマン同様、触覚が最も低次の原初的な感覚で、視覚、聴覚はより高次の感覚であるとした。そして、図2のように、矢印の方向に共感覚比喻が用いられていると結論づけ、五感の発達過程とも一定の相関関係のあることを示している。

図2



しかし、山梨(1988:58-59)の用いた用例は、量的に少なく、⁶種類も偏っている。⁷

武田みゆき

また前述のように、擬音語と擬態語を同等のフィールドで扱うならば、擬音語の擬態語化に共感覚比喩の介在が可能であり、「聴覚を共感覚⁶とする比喩表現が存在しない(山梨(1988:61))」と断言することはできない。

中国語においては、共感覚比喩体系について論じたものは、管見の限りほとんどなく、共感覚比喩に触れているものについても、先行研究の一方向性を否定しているものはあまりない。⁹

以上のように、共感覚比喩における感覚転用は、各言語を通じて普遍的に一方向性を示し、それは低次の感覚から高次の感覚へと理解される、生理的な比喩によって成立しているというのが、従来のおおよその見解である。本稿は擬音語の擬態語化をとり上げ、そこに働く共感覚比喩の多様性を示し、その仕組みが必ずしも普遍的ではないことを提示する。

2. 中国語擬音語の擬態語化にみる感覚転用

中国語には、日本語の擬態語にあたる文法用語がないとの指摘がある。¹⁰ 擬態語は、感覚的な性格をもつものであるが、中国語の表現が、「-地」で状語を作るという生産性の高いこと、補語表現や四字成語の頻用が日本語の擬態語を用いた表現を代替していることも、特に擬態語として意識させない理由にあげられる。また、本稿でとり上げるA B B型形容詞も擬態語的機能を有するが、形容詞の一形態として扱われている。さらに、普通の名詞や動詞などの重畳形も擬態語的に使用されている。例えば、「絮絮叨叨」(くどくど)、「勉強勉強」(しぶしぶ)、「匆匆忙忙」(せかせか)などがその例である。一方、他の言語と同様、擬音語がそのまま擬態語として、音声ではなく、様態を表現するために使用されることも少

⁶ 各感覚につき、二例ずつ。

⁷ 例えば味覚からの転用は、「あまい」に限られているが、一般に各言語を通して「あまい」は転用しやすく、味覚全般について一般化できるものではない。

⁸ ここでの「共感覚」は、被修飾語となる「原感覚」に対するものであり、修飾語となる感覚のことである。

⁹ 洪玉芳は、第51回日本中国語学会(2001.11.3-4)研究発表要旨(p.15)の中で「転移の方向が一方向ではない」と指摘しているが、詳細は、本稿執筆時点では不明。

¹⁰ 野口(1995:ix)

なくない。

耿(1986)は、中国語の擬音語について、聴覚以外の感覚表現にも使用されることについて以下のように述べている。

汉语拟声词中，除了只显示听觉形象色彩的一部分词以外，还有相当多的一部分词兼有其他感觉的形象色彩。这些拟声词的形象色彩，包括有视觉形象的，振动觉形象的，温度觉形象的，触摸觉形象的，等等，不一而足。(耿(1986:40))

「其他感觉的形象色彩」の兼有は、聴覚からその他の感覚への感覚転用のあることを示唆しており、以下のように、共感覚比喩（「通感」）の作用していることも認めている。

其实何止嗅觉，就是视觉、意觉、动觉、皮肤感觉等也都可以向听觉挪移，并用拟声词来表达。例如，出于心理习惯，人们在语言活动中，就有时把一些本来没有声响的动作和动态也用拟声词赋予一种声音（可称之为“虚声”）。这种方法，用现代心理学和语言学的术语来说，称为“通感(Synaesthesia),”或“联觉”，“感觉移借”。(耿(1986:92))

以下、一般の擬音語やA B B型形容詞の表現例から、そこに作用している共感覚比喩の感覚転用をみていく。

2-1 一般の擬音語

a. 視覚への感覚転用（聴覚 視覚）

（以下、例文の出典で明記のないものは、相原茂『現代中国語A B B型形容詞逆配列用例辞典』による）

- (1) 林伯唐反倒得意地哈哈笑了。（杨沫《青春之歌》）
- (2) 李四妈，不象平日那么哇啦哇啦的，用低微的声音回音。(老舍《四世同堂》)
- (3) 我看着那小男孩，忽然蹭地站起来……(野口宗親『中国語擬音語辞典』)

(1)では、本来笑い声として生成された「哈哈」が、ここでは、「得意地」の描写から、音声よりもその外見上の様態描写に重点が置かれていることを窺わせる。

武田みゆき

これは、笑い「声」から、時間的連続性に基づく、口を大きく開けて笑う「姿」への換喩である。(2)の「哇啦哇啦」は、「低微」の反義として扱われている。「低微」は、後続「声音」の定語であり、したがって「哇啦哇啦」自体は、音声そのものではなく、音声の様態を描写している。これも(1)と同様の理由による換喩である。(3)の「蹭」は、突然のすばやい行為に伴う、なんらかの音を表現しているとともに、その行為の様態も表現していると考えられる。これも「蹭」という音声の発生と時間的連続性に基づく換喩と考えられる。

以上から、これらは、擬音語を用いてはいるが、視覚による感覚比喩表現であるとみることができる。このように、擬音語を用いて視覚刺激である様態を描写する例は他にも多くみられるが、そのほとんどは換喩が作用しているとみてよい。

b. 触覚（温度感覚、皮膚感覚、体感覚などを含む）への感覚転用（聴覚 触覚）

- (4) 那块大岩石也从他们头顶擦过，”哄”地象头笨重的大黑熊一样掉进了山道另一侧的山沟里。（相原茂『現代中国語擬音語小辞典』）
- (5) 太阳穴嘣嘣直跳，额头也渐渐沁出了汗珠。（相原茂『現代中国語擬音語辞典』）

(4)では、落ちる物体が大岩石で、かなりの重量が想像されることや、熊にみだてていること、また落ちていく先が谷間であることなどから、聴覚に顕著な刺激となりうる音声を発生させにくく、「哄」は「音」を表現すると同時に、その「振動」を体感、意識して描写していると考えられる。これも、視覚への転用同様、「哄」で表現される音声の発生と時間的連続性に基づく換喩である。(5)では、こめかみの体感覚を描写している。こめかみの音は、他覚では、存在自体が認識できないが、自覚では、体感覚と同時に音声らしきものも認識するため、やはり時間的連続性に基づく換喩とみることができる。こめかみの音の描写が、自覚に限られるゆえんである。

以上のように「音」を表す擬音語を用いて聴覚以外の感覚をも表現する比喩は、おおそ換喩によることが多い。

2-2 A B B型形容詞

A B B型形容詞の語構成は、AにB Bが付随している「A・B B型」と、A BのBが重畳している「A B・B型」に大別される。¹¹ そしてこの二類は、B BやA Bの語が漢字の原義を維持しているか否かによって、さらに以下のように細分される。

A・B B型：

B Bに原義が認められるもの……… 冷冰冰、直盯盯、血淋淋、眼睁睁

B Bに原義が認められないもの……… 羞答答、娇滴滴、硬梆梆、慢腾腾

A B・B型：

A Bに原義が認められるもの……… 孤单单、光溜溜、颤抖抖、红润润

A Bに原義が認められないもの……… 骨碌碌、哗啦啦、滴溜溜、轰隆隆

・ に属するものは、それぞれB BやA Bの語に原義が生きている表意語であるが、この類は本稿での分析対象とはしない。 に属するものは、現在の一般の擬音語の一形態であり、前節「2-1一般の擬音語」での分析対象である。

ここでは、 に属するものについて論ずる。 に属するものは、Aは実語素であるが、B Bに原義は認められず、表音接尾辞と化している。しかしながら、そこに全く意味が存在しないわけではない。

- (6) 实行了岗位责任制，大家的干劲都很足，再也不象以前那样干什么都慢腾腾的了。
- (7) 老郑还是老习惯，先不表态，等到大家问够了，才慢滋滋地喝了两口滚烫的茶水，一锤定音，说了一个单音词：“好！”

(6)(7)の例で、下線部分は二文とも「慢」を表現しているが、全体の語義は微妙に異なる。これは、B B部分において、どのように「慢」であるのかを表現しているからであり、¹² その意味で、このB B部分は音声による擬態語表現とみること

¹¹ 呂(1980:638)は、「大部分ABB式是由A加BB构成的,但有些可以认为是由重叠B构成的。」と述べている。

¹² 相原(1990:ii)は「绿葱葱」を例に、「我々を不安にさせるのは“葱葱(B B)”の部分である。しかも、この-B B部分こそが「いかように“绿”であるか」を描く肝要な成分なのである。」と指摘している。

武田みゆき

ができる。ここでは、B B部分が擬音語からの転用と考えられるものについて、その擬態語化に作用する共感覚比喩の実態を観察する。

一般に、B B部分が複数種の漢字により表記可能であり、その表記法が不安定なもの、漢字の表音性を借用しているからであり、擬音語からの派生という可能性は高い。しかし、そのいくつかは漢字の表意性を語義に反映しているものもある。例えば、「呖(刺、〔足此〕)溜」「唛(嗤、吃)溜」は、「滑ったり、ひきずったり、すれたりする音」を表すが、この擬音語を構成する「溜」は、「滑って進む、すべすべした」など、関連のある意味を有している。しかしこれらの分析には、表音が先か表意が先かという通時的な問題、或いは両者の相互作用、音象徴、¹³ 語源の問題を避けて通ることはできない。その論議は慎重でなければならず、さらに詳細かつ総合的な分析が求められるため、このように表意性も語義に反映しているA B B型形容詞の分析は他稿に譲る。

a. 視覚への感覚転用（聴覚 視覚）

- (8) 医生的大夫、护士也来参加广播操的比赛，他们戴着白帽子，穿着白大褂，做得十分整齐，冷眼一看，白刷刷的一大片。
- (9) 初到广州正是鲜花盛开的季节，特别是那高大的木棉树，上面开满了红嘟嘟的花朵，远远望去，火红一片，甚是壮观。

(8)では、白さの状態がどのようなのかを「-刷刷」で表現している。つまり、本来はある実態音の属性の一部を、聴覚で捕らえて表徴する「刷刷」が、ここでは視覚で捕らえた白の属性の一部を表徴しているのである。「刷刷」は、本来「急に勢いよく摩擦する音」などを表す擬音語であるが、この音を伴った結果発生する「整然とそろっている状態」と、白さがそろっている状態の類似性に基づく隠喩が作用している。¹⁴ 同様に(9)では、赤さの状態を「-嘟嘟」で表現しているが、これも「嘟嘟」によって表徴された「後から後から続いて出る感じの音・液体が波打つように流れる音」の何らかの属性と、赤さのサマに共通部分があり、類似性によ

¹³ 野口(1977:22)では、「溜」を構成する音素〔l〕そのものが、「一つには静止に逆らう動揺・流動・飛翔・回転等の運動を、一つには粘滑の感を表出する」としている。

¹⁴ これを、意味の類似性でなく、「刷刷」を構成する音〔s〕自体の類似性とする考えもあるが、本稿では、音も属性の一部と捉える。

る隠喩が作用している。

b. 味覚への感覚転用（聴覚 味覚）

- (10) 从那之后，一尝到这种甜溜溜的马奶子葡萄，我不由地就想起了南疆之行。
- (11) 灌肠的确很好吃，外焦，里嫩，浇上醋汁、蒜泥，酸溜溜、辣丝丝儿的。

味覚への転用例として、(10)(11)の「甜溜溜」「酸溜溜」などが挙げられる。しかし、前述のように、接尾辞「-溜溜」は他の語幹に付随した場合、「光溜溜」「滑溜溜」のように、その語義が反映される例も見られるので、ここでは詳細な分析は避けるが、「灰溜溜」「软溜溜」など、「溜溜」が純粹に表音接尾辞と思われる例も少なくない。

c. 嗅覚への感覚転用（聴覚 嗅覚）

- (12) 大道两旁的草原里，黄色的猫爪子花，淡青色的五月蓝，紫红色的喇叭花……一丛丛，一片片陪着绿草，散发香扑扑的芬芳。
- (13) 昔日臭烘烘的烂池塘，如今已建成了一座美丽的大花园。

(12)の「香扑扑」では、花の芳しい香りを描写しているが、接尾辞「-扑扑」によって、どのように芳しいかを表現している。「扑扑」は、本来、「圧縮されていたものが噴出したり、破裂したりする時の音」を表現するが、これが表徴する何らかの属性と、芳しさの様態の何らかの属性に、ある共通感覚があり、類似性に基づく隠喩が作用していると思われる。(13)の「臭烘烘」における「-烘烘」も、どのように臭気があるのかを表現しているが、これも「火がさかんに燃える音」を表現する「烘烘」で表徴されるある属性と、臭気の状態のある属性の間の類似性に基づく隠喩が作用している。

d. 触覚（温度感覚、皮膚感覚、体感覚などを含む）への感覚転用（聴覚 触覚）

- (14))地面温度已经明显下降了许多，本来就不热的天气，更平添一股凉飕飕的

武田みゆき

感觉。(《人民日报》1999.8.13)

- (15) 由于身体太弱，虽然穿得很多，但我还是感到冷飕飕的。
(16) 这也叫馒头？硬梆梆的，简直象铅球！
(17) 这双鞋穿在脚上紧梆梆的，没法走远路。

「冷飕飕」「冷飕飕」は、「飕飕」自体が風の音を表現する擬音語であるために、「一股冷飕飕的夜风」「一股冷飕飕的晓风」「冷飕飕的北风」などの例のように、風の状態を描写していると思われる例も多い。しかし、(14)では、「感觉」と、なんらかの低温感覚を表現している可能性は強く、(15)でも「感到」が用いられていることから、なんらかの低温感覚を表現しているとみてとることができる。つまり、ここでは、擬音語「飕飕」が、音声ではなく、どのように涼しいか、寒いかといった温度感覚の様態を表現しているのである。「一股冷飕飕的夜风」のように風の状態を描写している場合は、近接性に基づく換喩であるが、温度感覚の様態を表現している場合には、「飕飕」で表徴される音の何らかの属性と、低温感覚の何らかの属性との間の類似性に基づく隠喩が作用している。

(16)の「-梆梆」は、饅頭の硬さを表現しており、(17)の「-梆梆」では、靴のきつさがどのようなものであるのかを表現している。「梆梆」は、本来「木を打ちつける音」を表現する擬音語であるが、この音によって表徴されるある属性と、(16)(17)のどのように硬いか、またはきついのかを表徴するある属性と共通感覚を有し、これも類似性に基づく隠喩である。

以上のように、擬態語のみに機能するA B B型形容詞においては、2-1の一般の擬音語とは異なり、擬音語の擬態語化に作用する共感覚比喩は、おおよそ類似性に基づく隠喩であることがわかる。

3 . 結語

従来、擬音語と擬態語の境界は曖昧にして論じられてきているが、そこに働く共感覚比喩は、換喩であることが多く、一方、擬態語のみの機能を有するA B B型形容詞に作用する共感覚比喩は、隠喩であることが多い。つまり、一般の擬音語には、時間的連続性に基づく換喩が作用するために、擬音語と擬態語は連続的

なものであり、そのことが、両者の境界を曖昧にしているのである。

また、擬音語の擬態語化が、従来の共感覚比喩の一方方向性に符合しないのは、共感覚比喩が多様な比喩システムを包含しているからである。池上(1978:142)が指摘しているように、言語によってその比喩の方向性が特徴的に現われることもあり、本稿で扱った擬音語の擬態語化以外の共感覚比喩については、さらに詳細な分析が求められる。

【引用文献】

- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館書店
(1978) 『意味の世界』NHKブックス、日本放送出版協会
ウルマン、S (1964) (山口秀夫訳) 『意味論』紀伊国屋書店
苧阪直行 (1999) 『感性のことばを研究する』新曜社
(2001) 「ことばと感覚」『言語』9月号、大修館書店、p.70-77
武田みゆき (2000) 「日・中擬音語の語彙度 人間の活動に関する音と外界音を中心」『ことばの科学』第13号、名古屋大学言語文化部言語文化研究会、p.171-186
野口宗親 (1977) 「中国語の擬声語の特質について」『熊本大学教育学部紀要』26号、p.15-24
(1995) 「中国語擬音語概説」『中国語擬音語辞典』東方書店、p.viii-xxvi
村田忠男 (1989) 「さわることば」『言語』11月号、大修館書店、p.62-67
森 貞 (1995) 「共感覚比喩に関する一考察」『福井工業高等専門学校紀要』第29号、p.251-268
山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版会
耿二岭 (1986) 《汉语拟声词》湖北教育出版社
吕叔湘 (1980) 《现代汉语八百词》商务印书馆
Williams, J. M. (1976) "Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change", *LANGUAGE*, 52: p.461-478

